

# 芝生保育が乳幼児の健康及び発達に及ぼす影響 に関する研究 第5報

## — 保育効果に関する調査 —

研究第5部 網野 武博  
嘱託研究員 丸尾 あき子  
金子 保 (淑徳大学)  
橋本 勲 (国立栄養研究所)  
森 日出丸 (日本緑営会社芝生研究所)  
研究協力者 塚原 富 (聖マリア保育園)  
兼子 肇 (神明保育園)  
川上 芳子 (同援みどり保育園)  
池田 麗子 (深谷保育園)

### I. 目的

本研究は、はだし保育、芝生保育への関心や論議が高まっている中で、これまで必ずしも明らかにされていないかかったはだし保育あるいは園庭における土、芝などの立地条件が、保育所の園児の健康・運動面、心理発達面に及ぼす影響について、比較的長期間にわたり検討し、保育所における園庭のあり方について考察を加えることを目的としてすすめられている。

ここに報告する第5報は、本研究の対象となっている4園の保育所園児の保護者に対して、保育所における保育効果に関して調査を行ない、その結果について検討を加えたものである。

### II 方法

#### 1. 調査の内容

- (1) 現保育園入所以前の保育状況
- (2) 入所時における保育への期待度
- (3) 入所後の保育効果
- (4) 入所後の変化
- (5) 日中子どもがそばにいないことについての心境
- (6) 家庭で養育することが望ましい年齢段階
- (7) 両親の子どもに対する養育態度
- (8) 芝生への関心

(9) 芝生に関する話題

(10) 芝生保育の長所

#### 2. 調査の方法

上記の内容について「お子様の保育にかかわる調査」を、昭和62年11月及び昭和63年1月に実施した。調査は、各保育所を通じて下記対象者に配布され、すべて記入法をとり、各保育所を通じて回答を得た。上記調査内容のうち、(8)~(10)の芝生保育に関する事項は、芝生保育を実施している2園のみについて調査を実施した。

#### 3. 調査の対象

調査の対象は、調査時点において在園する園児の保護者であり、園児の在籍保育所別、性別にみた対象者数は、表1のとおりである。また、園児の年齢別、入園時年齢別、在園期間別にみた対象者数は、表2のとおりである。調査の回答は、芝生園186名、非芝生園234名、計420名の保護者全員から得られた。

表1 園児の在籍保育所別、性別対象者数

園名		男児	女児	計
芝生有り	A 保育園	65	59	124
	B 保育園	33	29	62
芝生無し	C 保育園	71	51	122
	D 保育園	64	48	112
計		233	187	420

表2 園児の属性別対象者数

年齢別	属 性							計
	0歳	1	2	3	4	5	6	
	8	37	53	89	85	91	57	420
入園時 年齢別	0歳	1	2	3	4	5	6	
	137	125	64	57	29	7	1	
在 園 期間別	1年	2	3	4	5	5~		420
		119	104	84	54	41	18	

III 結果及び考察

クロス解析を含むデータ集計・分析の結果のうち、特徴のみられたもの、統計的に有意なものをまとめると、以下のとおりである。

1. 入所時における保育への期待度

今日、保育所に乳幼児を預けている保護者は、保育所に対し、どの程度期待をもっているのであろうか。このため、保育所における役割をつぎの8領域に分けて、期待度をみた。

- a 世話（母親に代わって面倒をみてもらう）
- b 子供の健康（活気がある、病気にかかりにくくなる等）
- c 子どもの情緒（素直、思いやりがある、心が豊かになる等）
- d 子どものしつけ（生活習慣を身につけ、身のまわりの処理をする等）
- e 子どもの教育（読み書きを学べる、幼稚園のような教育等）
- f 子どもの遊び（遊び道具が多い、屋内、屋外で思い切り遊べる等）
- g 子どもの友だち（仲間関係ができる、友達が多い等）
- h 親への相談・助言（育児や心配事の相談にのってくれる）

それぞれの領域について、回答の結果から期待度（すべての保護者が「非常に期待していた」場合を100とした指数）を算出したものが、図1であり、また領域別に期待をみたものが図2である。乳幼児の環境として、保育所が友達、遊びに恵まれるであろうという予想から、この二つが「非常に期待していた」割合が高く、保育所への期待度が最も高い。その指数は80を越えている。次いで、保育者とのかかわりや保育者の保育観、態度とか

かわりの深いしつけ、情緒そして世話に関する指数が60を越えている。保育の重要な要素である健康への期待は50を越える程度であり、また、幼児教育とかかわりの深い教育への期待度は36.1ときめて低くなっており、「期待していなかった」割合は全体の4割を越えている。保育所の役割として一層重視されてきている親への相談・助言への期待度は、50を割ってはいるが、「期待していた」割合は全体の6割を越えている。

最も期待度の高い友達、遊びは、すべての年齢にわたって共通の傾向がみられ、今日とすれば稀薄となりがちな幼少期からの人的な遊び環境として期待されていることをあらためて示すものである。一方、母親に代って保育にあたることを期待する、いわゆる世話についてみると、0歳児の保護者が非常に高い割合であるほかは、期待度は非常に低い、乳児保育における個別保育の重要性から、次第に集団保育の意義に移行していること、しかも教育よりも、幼児相互の関係を重視した集団保育が期待されていることが、これらの結果から確かめることができる。

なお、保育所の保護者に対する相談・助言への期待は、図3にみるとおり、園児の年齢が低い程おおむね高い。とくに0歳から2歳までの乳幼児をもつ保護者に対するこの役割が重要であることが理解できる。

2. 入所後の保育効果

これら8領域に関して、実際に保育所に入所した後どの程度効果があったと考えているのであろうか。それぞれの領域について、回答の結果から効果度（すべての保護者が「非常によかった」と回答した場合を100、「非常によくなかった」と回答した場合を-100とした指数）を

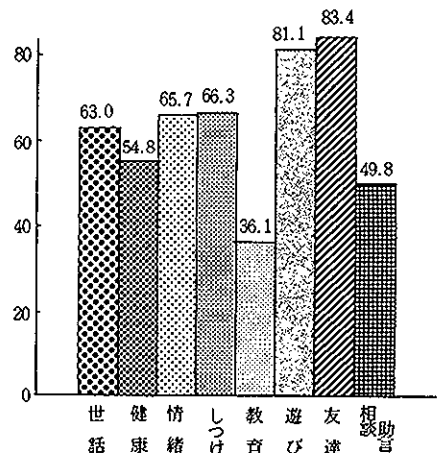


図1 領域別期待度

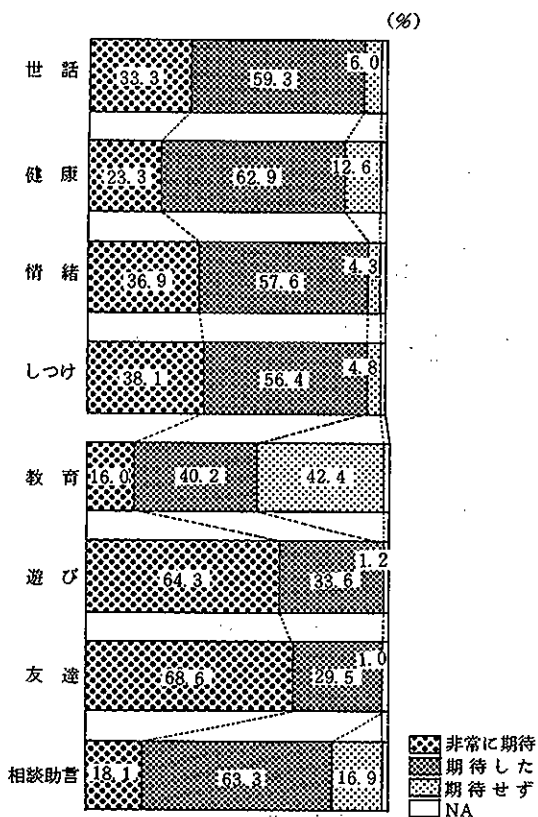


図2 領域別保育への期待

算出したものが、図4であり、また地域別に効果をみたものが、図5である。図1及び図2の期待の内容を、図4及び図5の効果の内容とがきわめて一致しているという結果が示されている。世話、健康、情緒、遊び、友達、相談・助言において、期待度と効果度の間に高い連関がみられる。しかし、しつけ及び教育に関しては、異なる結果がみられた。図6にみるとおり、しつけに関しては、期待していなかった保護者の中にも「非常によい」効果をあげている者と、どちらでもないと回答している者がともに共存し、評価が分かれる傾向がみられた。そ

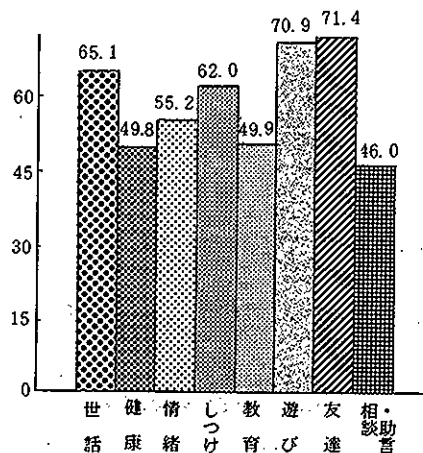


図4 領域別保育効果度

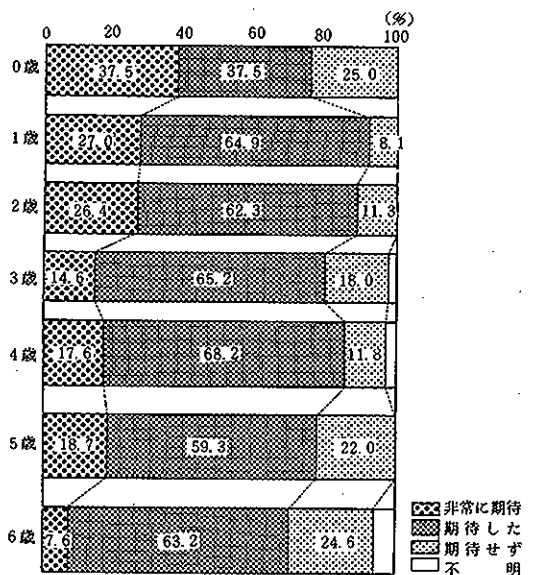


図3 園児の年齢別「相談・助言」への期待

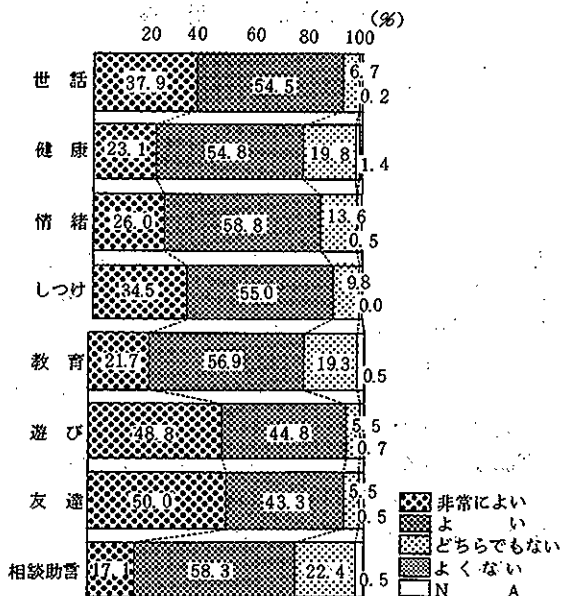


図5 領域別保育効果

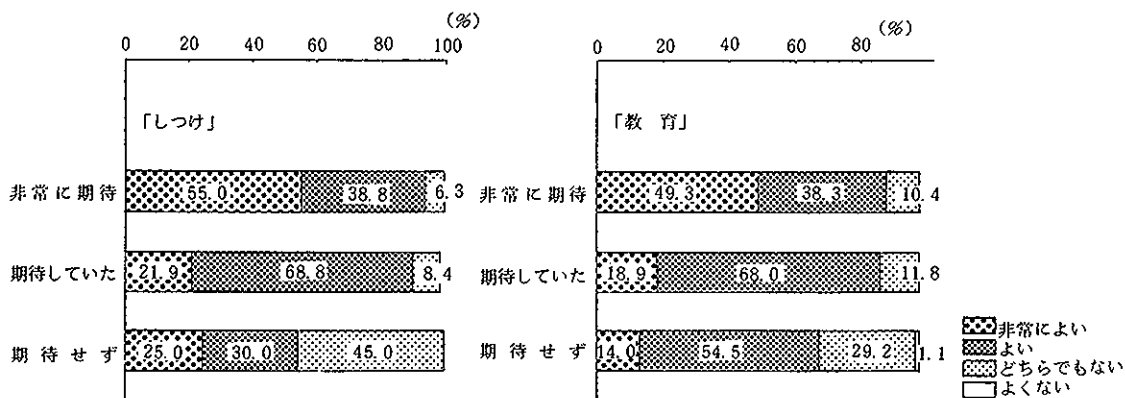
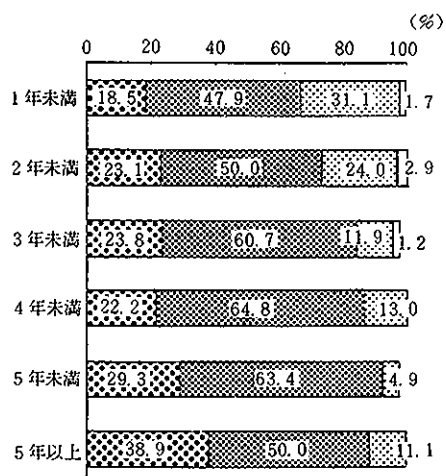


図6 「しつけ」及び「教育」に関する期待と効果

1) 在園期間別「健康」の効果



2) 年齢別「相談・助言」の効果

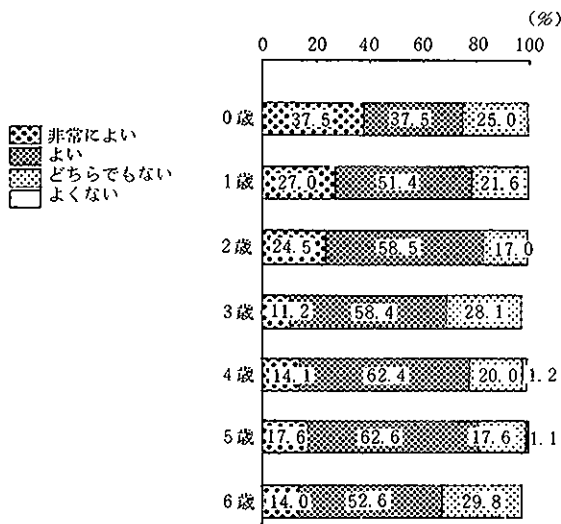


図7 健康及び相談・助言に関する属性別効果

して教育に関しては、期待度よりも効果度が高く、とくに期待していなかった保護者の中に、よい効果をあげている割合が比較的高く、保育所の今日の実際の役割を評価する上で注目される結果であった。

領域別に保育効果の特徴がみられたものを示すと、図7のとおりである。まず、健康に関しては、園児の在園期間が長くなる程「非常によい」と回答する保護者の割合が高い結果がみられた。即ち、活気があり、病気にかかりにくいなどの評価は、保育所に早期から通所している園児により多く示されており、他の調査研究と比較しても、この傾向は保育環境の効果として、重要な意義をもつと思われる。次に相談・助言に関しては、0歳から

2歳頃までの園児をもつ保護者が、他の年齢層よりも「非常によい」と回答する割合が高いという結果がみられた。図3にみたとおり、この点での保護者の保育所に対する期待は高く、これに応える面が示されたといえよう。この点も、乳幼児をもつ保護者に対する保育所の今日の役割を考える上で重要な意義をもっている。

3. 入所後の変化

保育の効果に関連し、園児が日常の家庭生活、社会生活において、保育所入所後にどのような変化がみられたであろうか。具体的には、つぎのとおり6領域について3段階の変化で評定した領域別にその変化をみたものが図8である。

網野他：芝生保育が乳幼児の健康及び発達に及ぼす影響に関する研究

朝食	よく食べるようになった	— あまり変わらない	— あまり食べなくなった
健康	病気をせず健康になった	— あまり変わらない	— 病気や心配事がふえた
活気	活気がでてきた	— あまり変わらない	— 活気がみられなくなった
意欲	意欲がでてきた	— あまり変わらない	— 意欲がうすれた
遊び	よく遊ぶようになった	— あまり変わらない	— あまり遊ばなくなった
機嫌	いつもげんきよくなった	— あまり変わらない	— きげん悪いことが多くなった

最も高い割合で「よい変化」がみられたものは、遊びであり、次いで活気、意欲である。保護者からみて、友達、遊びという保育環境の高い効果は、これらの「よい変化」と結びついていることが示唆された。健康、機嫌

は、個々の園児の個人差が、また朝食は個々の家庭生活パターンの差が関連する面も多く、とくに朝食では「よい変化」の割合は全体の3分の1を超える程度に過ぎなかった。

属性別に入所後の変化に特徴のみられたものを示すと、図9のとおり健康の領域に関するものである。即ち、年齢が高くなる程また入園時年齢が低い程、健康に「よい変化」のみられる割合は高い傾向がみられた。このことは在園期間の長さとも関係することを示唆するものであるが、図9にみるとおり、おおむねその傾向は認められるものの、在園期間が5年前後即ち、乳児期から保育を受けている園児に関しては、それが必ずしも顕著ではない。

4. 保護者の保育に関する意識

以上に述べてきた保育環境に関する効果は、保育所に対するあるいは保育に関する保護者の意識とも深く関連する。また、保育者自身の園児に対する養育態度も保育環境の効果と無関係ではない。本調査では、これらにかかわる事項と保育環境の効果との関連についても検討を加えた。

1) 入所以前の保育状況

まず、現保育所への入所以前の保育状況をみると、図10のとおり以前に預けられた経験のある園児は、45.2%であった。このうち、他の保育所及び保育施設に預けられていた園児が46.8%と約半数に近く、したがって園児全体の約5人に1人にあたる。次いで父方又は母方祖母に預けられていた園児が40.5%であり、その他の身内・親戚(3.7%)を含めると、身内の者に預けられていた園児も全体の約5人に1人である。近所の個人家庭・保育ママに預けられていた園児は15.2%と低く、園児全体の約14人に1人となる。

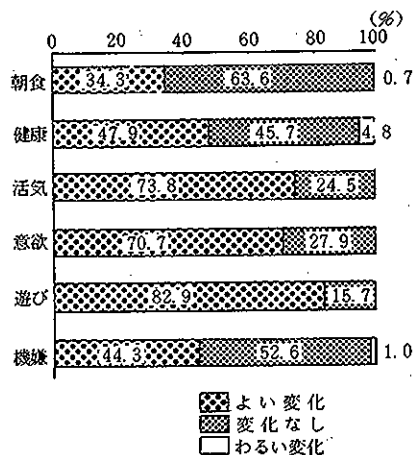
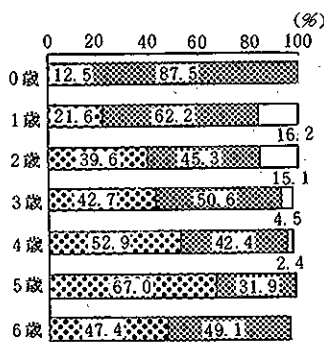
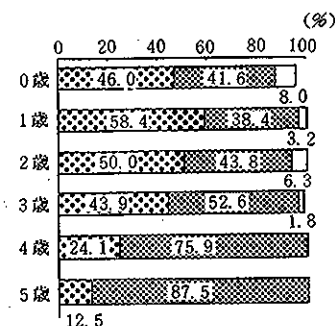


図8 領域別入所後の変化

- 1) 年齢別入所後の変化



- 2) 入園時年齢別入所後の変化



- 3) 在園期間別入所後の変化

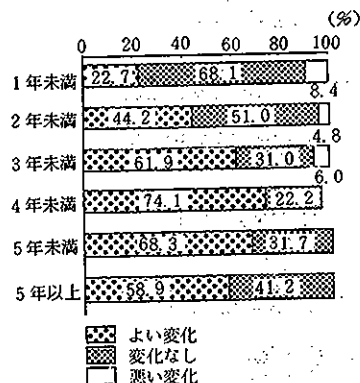
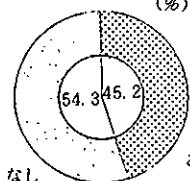


図9 「健康」に関する属性別入所後の変化

1) 以前に預けた経験 (%)



2) 預けた対象 (%)

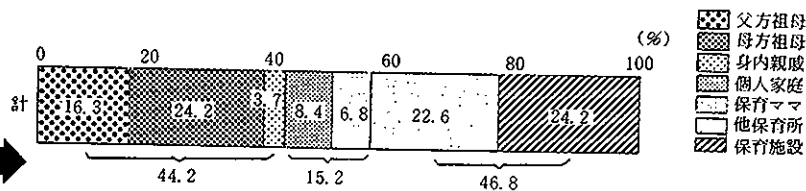


図10 入所以前の保育状況

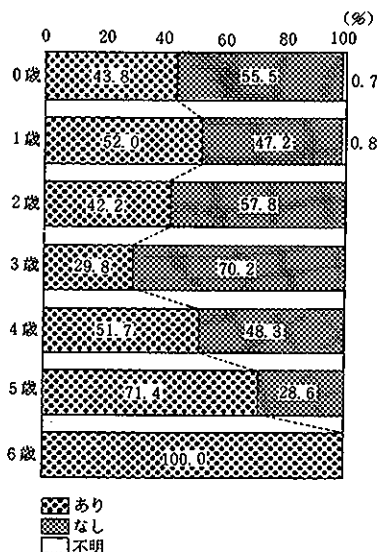


図11 入園時年齢別預けた経験

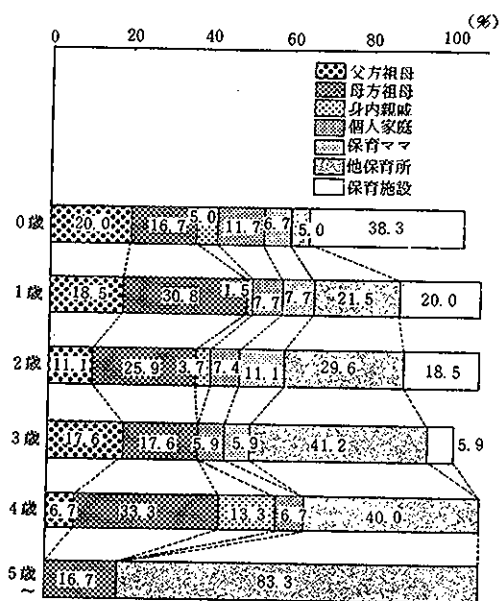


図12 入園時年齢別預けた対象

これを、入園時年齢別に預けた経験の有無と預けた対象をみると、近年の保育ニーズと保育環境の対応をより理解することができる。図11にみるとおり、入園時4歳以上の者は、預けられた経験が半数を超え、年齢とともに著しく高まる。一方、0歳から2歳にかけてももうひとつの山を構成しており、1歳では半数を超えている。図12で、各々について預けた対象をみると、大きな特色がみられる。他の保育所へ預けた経験は、年齢が長ずるとともにその割合は高まる。転居等家庭の事情により保育所を代える例が多い。一方、0歳から2歳にかけては、とくに乳児については、その他の保育施設即ちベビー・ホテル等の無認可施設へ預けた経験の割合が高い。保育ニーズに対し、0歳児保育の資源として、保育所よりもこれら施設が対応している状況は、他の調査研究からも示されているが(注1)、本調査からも十分にうかがえる。さらに、5歳以上を除いて祖母に預けられた園児が一定の割合でみられる。これらの過去の経験は、先きにふれた保育の効果等に直接、間接的に影響していることが考えられる。保護者が、以前の保育環境が不十分であったと感じている場合、比較的満足していた場合など、関連する属性が不十分であるため、ここでは明確に示すことはできないが、この面での検討を加えることが新たな課題といえる。

2) 日中子どもがそばにいないことについての心境

保護者のうちとくに母親は、自分が日中校労しているため、子どもの養育にかかわれないことについて、何らかの心苦しさをおぼえていること示す調査結果が過去にもいくつかみられる(注2)、日中子どもがそばにいないことについて、全体の傾向をみたものが表3であり、園児の年齢別に心境をみたものが図13である。全体的には「子どものことが気になる」と回答した保護者が81%と圧倒的に多く、「しかし保育所にあずけているのであまり心配ない」とする回答がその4分の3を占め、全体でも60%に及んでいる。親子の接触の機会は少なくなるものの、保育所という環境への依存、期待、信頼等の心境が最も多く示されている。子どもがそばにいないことに関する両極の心境即ち、わずらわしさがなく、仕事など

に専心できるとする回答、及び心配になったり心苦しく思うとする回答は、前者が約6%であるのに対し、後者では約12%みられた。

図13にみるとおり、園児の年齢によって、保護者の心境は異なる。0歳児では、37.5%の保護者が「仕事のことやむを得ないが、心配になったり心苦しく思うことがある」と回答している。この回答は、年齢とともに低くなるが、しかし3歳までは10%以上を保っている。他方、「わずらわしさがなく、仕事などに専心できる」

表3 日中子どもがそばにいないことについての心境

	比率 (%)
わずらわしさがなく、仕事などに専心できる。	6.2
子どものことが気にはなるが、仕事のことやむを得ない。	21.0
子どものことが気にはなるが、保育所に預けているのであまり心配しない。	60.0
仕事のことなどでやむを得ないが、心配になったり心苦しく思うことがある。	11.4
さみしい思いをしているのではないかと心苦しく思うことがある。	0.5
計	100.0

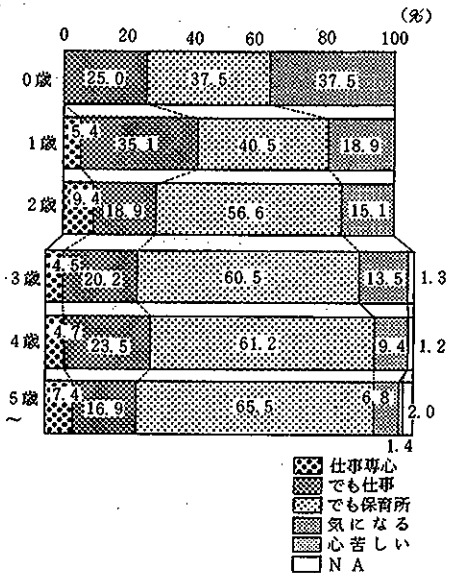
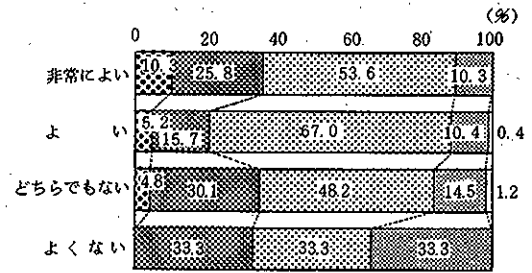


図13 園児の年齢別日中子どもがそばにいないことについての心境

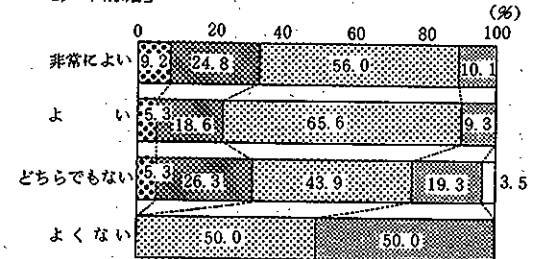
とする回答は、必ずしも年齢とともに高くなってはいない。乳幼児をもつ保護者にとって、日中子どもがそばにいないことについては心苦しきなど何らかの心境をもつことが通例であることが、あらためて理解できる。

ところで、これらの心境と保育の効果の関連について検討を加えたが、領域別には健康、情緒、友達に關し、仕事などに専心できる心境と、心苦しきが強い心境とでは、保育効果に明らかな差がみられた。図14にみるとおり、仕事などに専心できるとする保護者の方が「非常に良かった」とする回答の割合が高く、心苦しきを強く感じている保護者は、「よくなかった」とする回答の割合が高いという傾向がみられた。保育効果に関しては、相

1) 「健康」



2) 「情緒」



3) 「友達」

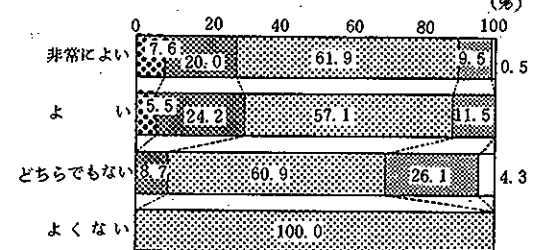


図14 領域別にみた保育効果別日中子どもがそばにいないことについての心境

談・助言を除き園児の年齢による相違はみられなかった  
ので、上記の傾向は、全体的な特徴であるといえる。これ  
に関しては母子の絆と集団保育との対比の上からも興味  
あるものを含んでおり、今後さらに検討を加えること  
としたい。因みに、以下にふれる図17もこの点と関連し  
ているものといえる。

3) 家庭で養育することが望ましい年齢段階

保護者とくに母親が、日中子どもと共に過す機会が限  
られることについての問題は、これら保護者の心境にみ  
られるだけではなく、古くから社会的にも議論が交わさ  
れることが多かった。このことは、母親の就労の機会と  
子どもの養育とを対立させることと結びつく最大の要因  
であった。母子関係の基本の必要性にのみ視点を向ける  
ことなく、子どもにとって積極的に受けとめられる保育  
環境の効果にも視点を向けて、この課題をみていく必要  
がある。

家庭で養育するのは、何歳までが望ましいかについて  
みたものが図15である。生後およそ1歳まで（育児休業  
明けを含む）と考えている保護者が27.4%と4分の1を  
超えている。3歳までが56.2%と最も多く、累係では  
83.6%に及んでいる。小学校に入学するまでは8.3%  
、できればずっと家庭では6.2%となっている。これらの  
結果は、保育所にわが子を預けている保護者を対象とし  
ているので、総理府における成人に対する定期的世論調  
査などの結果と比較すると、その年齢段階は非常に早期  
の方に傾いている(注3)これを園児の入園時年齢別にみ  
たものが、図16である。各々の保育ニーズ、預けた年齢  
を反映して、入園時年齢が高くなる程、家庭で養育する  
年齢段階も明らかに高くなっていることが理解できる。

これをさらに保育効果との関連でみると、しつけ及び  
友達の領域で特徴がみられた。即ち、図17にみるとおり  
家庭で養育する年齢段階がおよそ1歳頃までとする保護  
者は、保育所におけるしつけ面及び遊び面で「非常によ  
よい」と回答する割合が高く、逆に小学校入学まである  
いはできれば家庭でする保護者は、「非常によかった」

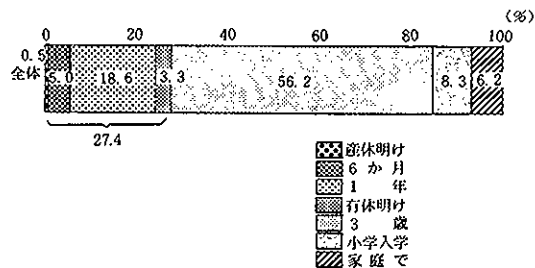


図15 家庭で養育することが望ましい年齢段階

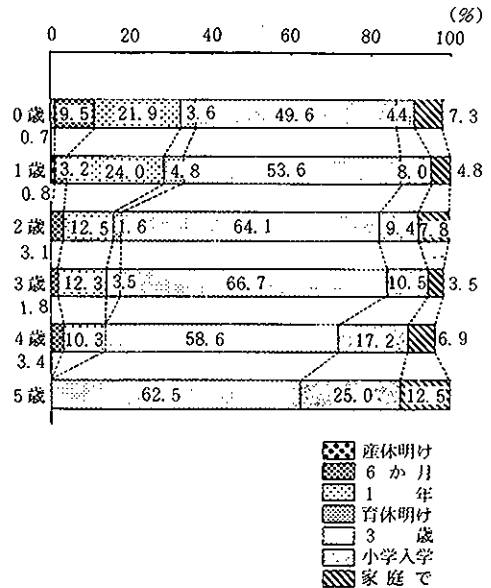
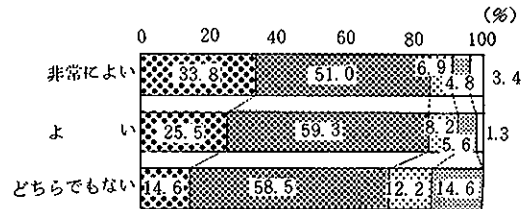


図16 入園時年齢別家庭で養育することが望ましい年齢段階 (NAを除く)

1) 「しつけ」



2) 「友達」

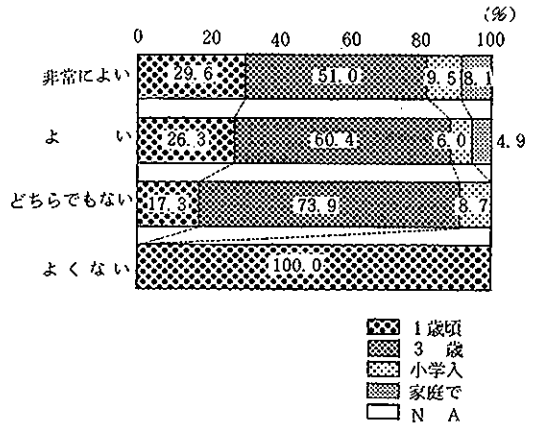


図17 領域別にみた保育効果別家庭で養育することが望ましい年齢段階



あるいは「よかった」と回答する割合はきわめて低くなっている。集団保育環境への評価に関し、わずかの領域ではあるがこのような相違がみられることは、保育所の専門性や集団保育への認識に相違がみられること、母子の絆への心理やこだわりが相違がみられることを示唆するものである。

4) 両親の子どもに対する態度

両親の子どもに対する態度と保育環境の効果等とはどのような関連があるであろうか。このため、父親 母親別にわが子に対する最も多い日常的な態度をみた。態度として分類した内容は、つぎの5つである。

1. 溺愛的 (何でも言いなりになりかわいがる方である)
2. 受容的 (気持をやさしく受けとめる方である)
3. 干渉的 (自分の思うようにしむける方である)
4. 厳格的 (甘やかさず、厳しく対する方である)
5. 放任的 (あまりかかわりをもたず、関心も示さない方である)

両親の子どもに対する態度を全体的にみたものが、図18である。父親の約13%は不明であるが、回答のあった内容からは、父、母ともに「受容的」と回答した割合が全体の約4割に及び、「厳格的」と回答した割合も16乃至17%とほぼ同じ割合である。対比的な回答は、母親の「干渉的」と父親の「溺愛的」であり、また母親では「放任的」は殆んどみられないが、父親の方が多くみられる。わが子が保育所に預けられている点で、全般的

な乳幼児の両親の傾向とほぼ一致しているかどうかについては、必ずしも定かではない。しかし、以上の結果は今日の両親の育児態度として指摘される内容と類似のものがある。

園児の年齢別及び在園期間別にみた母親の育児態度をみたものが、図19である。母親は、わが子の年齢が高まるにつれ、「受容的」、「溺愛的」割合が低下し、「干渉的」割合が高まっている。また特徴的なことは、園児の在園期間別にみた図19の結果に示されているように、保育所に預けられている期間が長い程、「溺愛的」、「受容的」傾向よりも「干渉的」傾向がより明らかになっている。

これに対し、父親の子どもに対する養育態度に関しては、全体的な傾向とは異なった特徴は見られなかった。また、保育に対する意識の面から、さらに保育効果に関

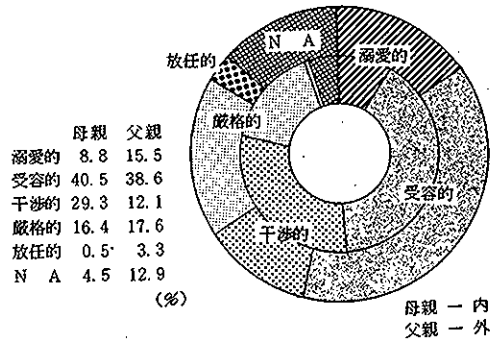


図18 両親の子どもに対する態度

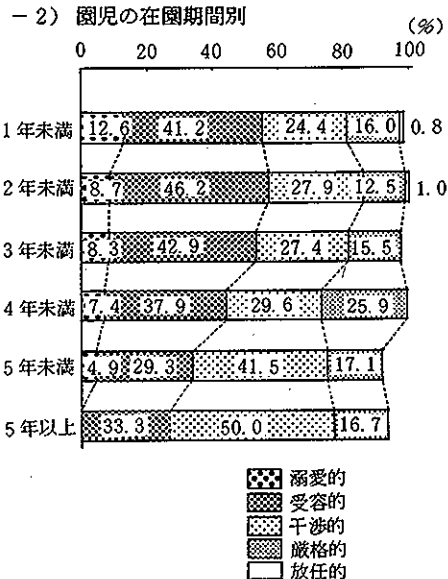
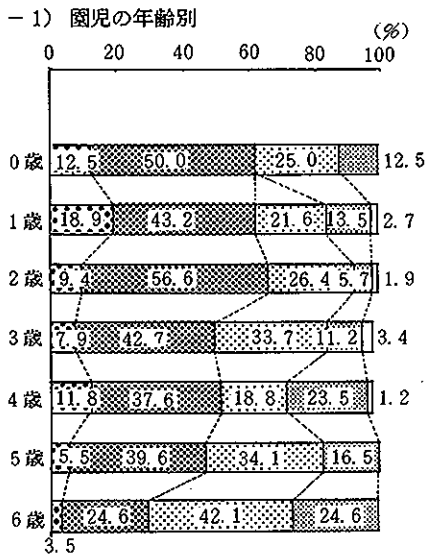


図19 属性別にみた母親の子どもに対する養育態度

する面からも、これらの養育態度と関連する特徴的な傾向は認められなかった。

5. 芝生の有無別にみた保育環境の効果

以上の内容は、本プロジェクト研究において継続的に対象としている4園すべての保護者に対する調査の結果である。以下には、表1に示した芝生園(計186名)、非芝生園(計234名)別に、これらの結果について比較考察したもののうち、特徴のみられたもの、統計的に有意なものについて、まとめてみたい。

(1) 入所後の保育効果及び保育後の変化

芝生園、非芝生園別に領域別保育効果度をみたものが、図20であり、また同じく領域別に効果をみたものが図21である。すべての領域について、保育効果は芝生園の方が高い結果が示され、友達、遊びの他、世話についても70を超える結果がみられた。図21にみるとおり、遊び、友達に関しては、「非常に良かった」及び「よかった」とする割合の合計は、両園ともほぼ同様であったが、「非常によい」とする割合がいずれの領域においても芝生園の方が高かったことが、このような結果となっている。

次に、保育後の変化について領域別にみたものが図22である。わずかな差ではあるが、よい変化をみると、健康、活気、遊びに関しては非芝生園の方が高い割合となっている。これまでの継続的研究を通じ、芝生があることの長所、短所及び芝生園における園児の発育・発達の特徴と、これらの結果とがどのように関係しているかは、必ずしもまだ十分に解明できない段階にある。その理由のひとつは、芝生の有無というファクターと他のフ

ァクターとを独立させて検討することに、方法上の限界が伴うことであり、そのふたつは、保育の効果あるいは保育後の変化の内容にみられるように、保護者の保育に関する意識や子どもの発達、変化のとらえ方に個人差や判断基準の多様化が伴うことである。両園における保育効果や保育後の変化については、今後なお継続的、総合的な検討の中で考察をすすめていきたい。

(2) 保護者の芝生保育に対する意識

芝生園の園児の保護者(計186名)のみを対象として、保育環境に芝生園庭が含まれていることについての関心あるいは意識を調査した。園庭に芝生が植えられていることについてどの程度関心をもっているかをみたものが、図23である。全体の80%以上の保護者が、芝生に対して何らかの関心をもっており、5人に1人の保護者が常に関心をもっていることが示されている。既に5年前から、園庭の半面(1年目は全面)に芝生が植えられ、芝生保育が行われている。したがって在園期間5年以上で0歳時から保育を受けている園児及びその保護者が、最も芝生との接触の頻度が高かったといえる。在園期間別に芝生への関心をみると、図24のとおり、在園期間が長い程したがって、芝生との接触の期間が長かった園児の保護者程、その関心が高いことが示されている。

芝生への関心は、直接保育園の場でふれるだけでなく、職員との話しあいそして園児との会話などを通じて高められたと考えられる。そこで、園児が保護者に対して、園庭に芝生があること、芝生のこと、芝生での遊びなどについて話題にしたことがあるかどうかを確かめたこと

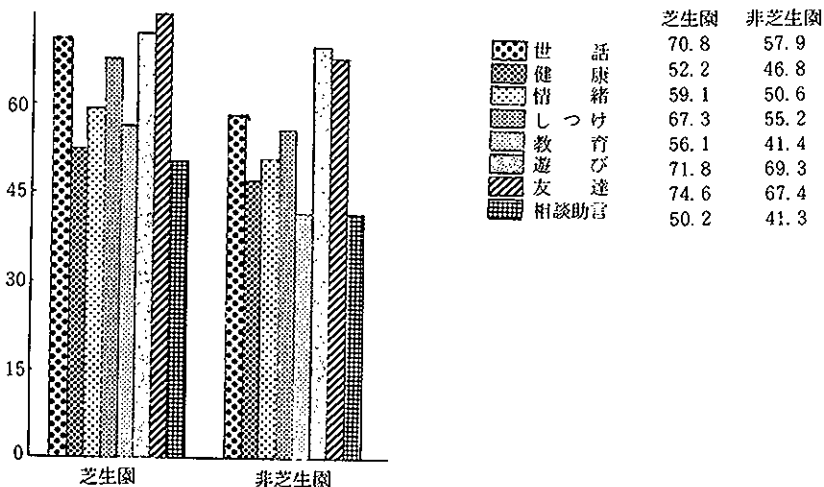


図20 芝生の有無別保育の効果度

網野他：芝生保育が乳幼児の健康及び発達に及ぼす影響に関する研究

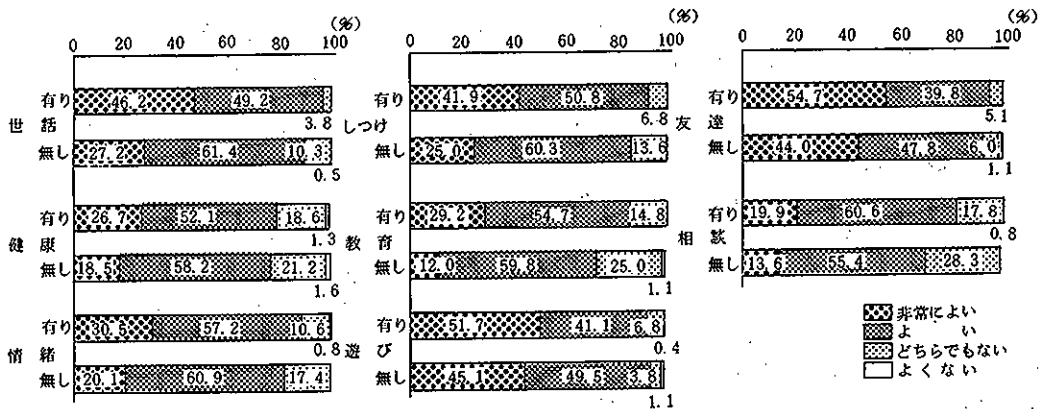


図21 芝生の有無別領域別保育の効果

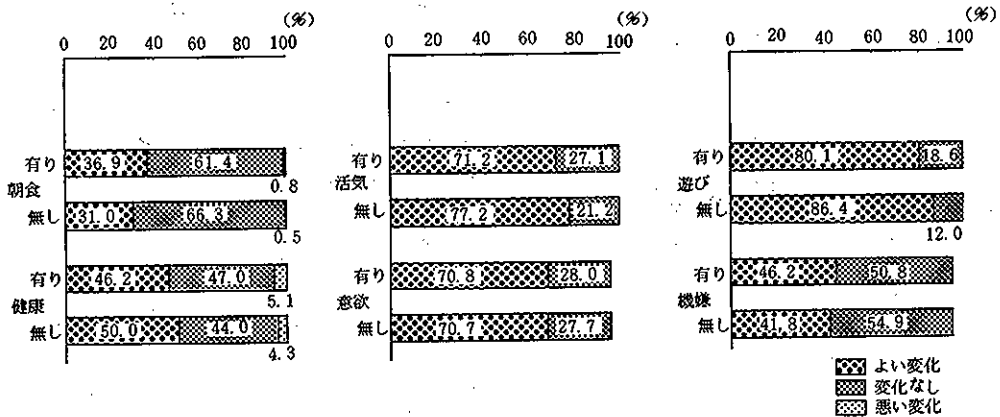


図22 芝生の有無別領域別保育後の変化 (NAを除く)

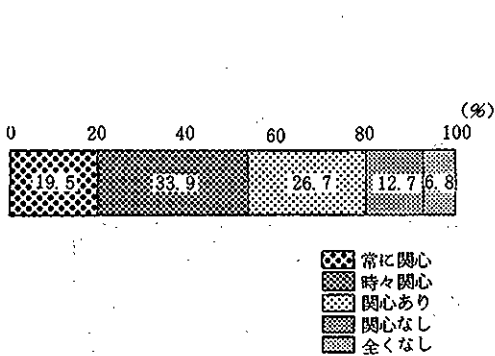


図23 保護者の芝生への関心

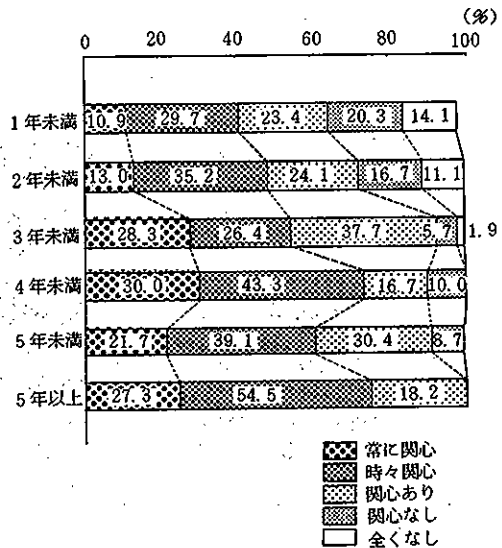


図24 園児の在園期間別保護者の芝生への関心

ろ、全体の25.4%が有りとし、74.6%が無しという回答であった。性別でみると、図25のとおり、女兒の方が男児より非常に高い割合でみられ、このような点に関する言語コミュニケーションの性差がうかがわれる。しかし、1乃至3歳児の段階ではおのずから言語コミュニケーションに限界がある。園児の年齢別にみると、図26<sup>-1)</sup>のとおり、4歳以上で35%前後の高さに及んでおり、幼児期における会話の展開や発達に関して興味あるデータを示している。

また、在園期間別にみると、図26<sup>-2)</sup>のとおり期間が長い程話題にした割合が高く、4年以上5年未満では約40%、5年以上では約46%という高さに及んでおり、芝生への馴化と芝生の話題との関連性にも注目されることである。

さらに、親子間における芝生の話題は、保護者の芝生

への関心と関連の強いことが予測される。芝生への関心別にみると、図26<sup>-3)</sup>のとおり、話題にしていることと関心の高さとは高い関連性がみられた。

最後に、保護者がうけとめている芝生の長所として、以下の項目の中からとくに関心を寄せる項目について選択することを求めた。

- ・はだしで伸び伸びと遊べる。
- ・汚れにくく、けがや危険の心配が少ない。
- ・屋外でころがったり、でんぐりがえしなど全身を使って遊べる。
- ・土と芝生をともに利用できる。
- ・緑色が目によい。
- ・緑の雰囲気精神に安定させる。
- ・屋外でのいこい、くつろぎの場となる。
- ・土や砂のようにほこりが立たず、清潔である。
- ・自然に親しみ、なじむ。

図27にみるとおり、はだしで伸び伸びと遊べること、屋外でころがったり、でんぐりがえしなど全身を使って遊べる、の2項目については、全体の4分の3の保護者が選択している。とくにはだしに関しては、78.8%の回答率を示し、園児の芝生に関する話題のテーマとして、はだしが最も多かったこととあわせ、芝生保育におけるはだし、全身の遊びへの関心は芝生の長所としてもまた受けとめられていると考えられる。なお、園児の年齢別に芝生の長所をみると、図28のとおり、はだしは年齢が長ずるに従っておおむね回答する割合が高まり、また汚れ・けがの少なさは0歳児に非常に高い割合でみられる等の特徴が示された。

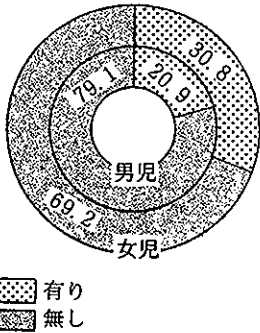


図25 性別芝生を話題にしたことの有無

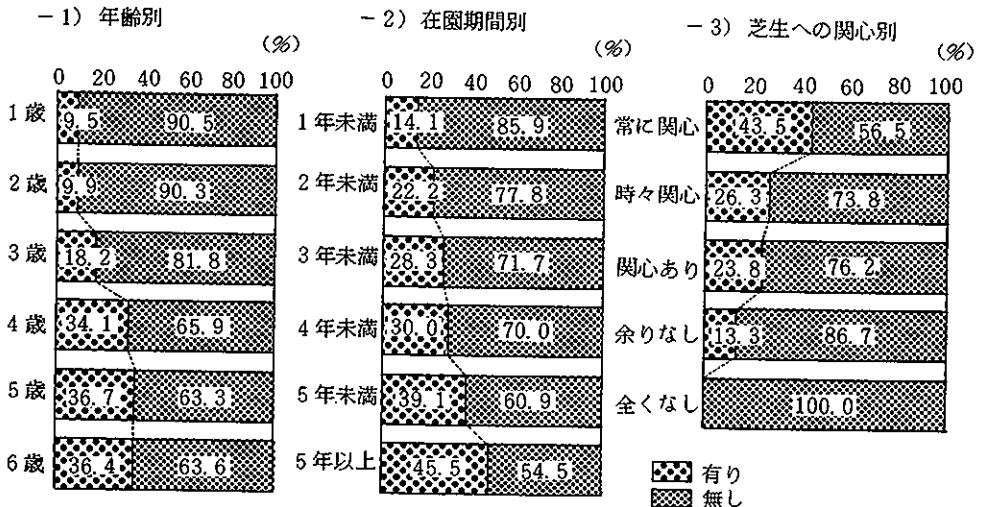


図26 属性別及び芝生への関心別芝生を話題にしたことの有無

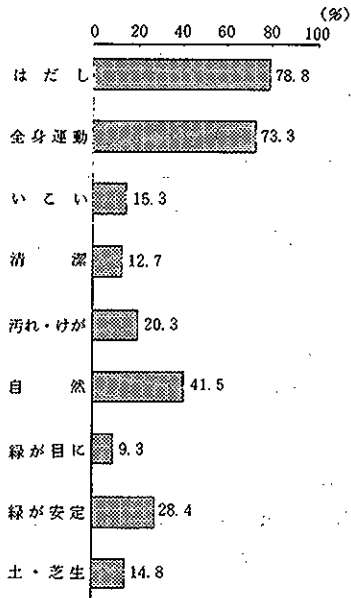


図27 保護者が関心を寄せる芝生の長所の割合

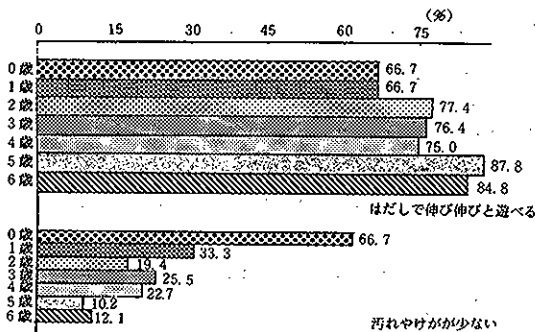


図28 園児の年齢別保護者が関心を寄せる芝生の長所の割合

#### IV 要約

第5報においては、保育所に通所している乳幼児の保護者に対して、保育環境に対する意識とくに保育効果に関する意識に関する調査及び分析の結果をまとめた。

1. 保護者の保育所への期待と保育効果に関する評定との関連は非常に高い。とくに友達、遊びへの期待と効果評定はともに高く、園児の入所後の遊び、活気、意欲へのよい変化を伴っている。今日、ともしれば稀薄となりがちな幼児期の人間関係、遊び環境として、保育所の果たす役割の重要性があらためて確認された。

2. 近年、保育所の役割として重視されつつある保護者への相談・助言の機能は、0歳及び年少幼児をもつ保護者や在園期間の長い園児の保護者の期待とその効果がみられることがわかった。また、在園期間が長くなる程園児の健康に関する保育効果が高いことがわかった。これらの結果も、保育所の役割として認識すべき内容である。

3. 日中子どもがそばにいないことについて気になる保護者の割合は、園児の年齢が低い程高いが、とくにこれらの保護者は、友達や情緒に関する保育効果の評定が低い傾向と結びつくなど、家庭内養育と家庭外保育に関する認識あるいは充足感の相違がみられる。これらの点は軽視できないものがあり、とくに家庭と保育所とが共に乳幼児を育てるという意識を育くむ必要がある。

4. 両親の日頃の養育態度と、保育効果、保育意識とはとくに関連がみられなかった。

5. 本研究の主題である芝生保育と芝生効果との関連性をみると、芝生園が非芝生園よりも保育効果がおおむね高い傾向がみられた。しかし、芝生の有無というファクターのみで結論づけるのに、より慎重さが求められる。芝生園における保育効果や保育後の変化については、今後なお継続的、総合的な検討を加えていきたい。

6. 芝生園の園児の保護者全体の80%以上が、芝生に関心をもち、全体の5人に1人は強い関心をもっていった。また、園児全体の4人に1人、4歳以上では3人に1人が芝生のことを家庭で話題にしていることが明らかになった。芝生があることの長所のうち、「はだしで伸び伸び遊べる」、「屋外でころがったり、でんぐりがえしなど全身を使って遊べる」ことについては、全体の4分の3の保護者が高い関心を寄せていることがわかった。これらの点は、芝生保育にあたって参考とすべき事柄である。

注1) 行政管理庁「保育所に関する調査結果報告」行政管理庁、1983

注2) 岩男寿美子他編「働く母親の時代——子どもへの影響を考える」、日本放送出版協会、1984

日本保育研究会「働く母親と子どもの保育所とのかわりについてのアンケート(報告)」日本保育研究会、1987

注3) 総理府広報室「女性に関する世論調査」総理府、1987

The Effects of Lawn Play Ground in Day Nurseries on the Health and Development of Children 5 :

Takehiro AMINO, Akiko MARUO  
Tamotsu KANEKO, Isao HASHIMOTO  
Hidemaru MORI, Tomi TSUKAHARA  
Hajime KANEKO, Yoshiko KAWAKAMI  
Reiko IKEDA,

This is the 5th report of the project study, in which we report the result of research and analysis on the parents' consciousness and opinions to the day care and day care effect on their children.

Association between parent's expectation to day care and evaluation of day care was very high, particularly on the categories of friendship and play. This suggests the important role of the day nursery as the friendfull, volitional play environment for preschool children.

Expectation and evaluation on the category of guidance and advices of day nurseries to their parents were high in them whose children have been day cared for long time and/or were very young. Their evaluation on the category of health was also high in them whose children have been day cared for long time.

Mothers who took their situation hard about their being separated from their children in the day time were more in them whose children were very young, and their evaluation on the categories of friendship and emotion were rather low. We must consider about the development of their co-rearing consciousness together with day nurseries.

In this research, parent's evaluation was higher in lawn play ground nurseries than in non-lawn play ground ones. We must consider prudently and longitudinally about this outcome.

Eighty percents or more of all parents whose children were day cared in lawn play ground nurseries had interested in the lawn, and one fifth of them had much interested. One fourth children and one third of 4 years of age children have talked about lawn to their parents. Parents had much interested in the merit of "being able to play freely with their bare feet" and "being able to play with all over their bodies on out door environment" in the lawn play ground. These outcomes are instructive and useful for us.